

人権を尊重するとは？

「女だから、男だからと決めつけた考えをしていませんか？」

お父さんの皿洗い

アキラさんが学校の宿題を終えて台所に行ってみると、父親が一人で皿を洗っていました。「なんでお父さんが、お皿を洗うの？」とたずねると、「最近お母さんは、仕事で遅くなって疲れているみただからね。今日は、お父さんが代わりにやっているんだよ」と父親は答えました。

アキラさんは、「よし、ボクも手伝うよ」と腕まくりをして、父親の隣で皿を拭き始めました。

お兄ちゃんの子育て

マサコさんの兄のお嫁さんが赤ちゃんを生みました。兄は、おむつを替えたり、赤ちゃんの入浴も手伝ったりしています。兄は、「子育てや家事など、家庭に進んで参加するのが、当たり前のことだ

と思うよ。楽しいよ」とニコニコして言います。

義姉は、「とても助かっています。ありがとう」と喜んで

兄の姿を見た祖母は、「男のすることじゃない。見ぐるしい！」とマサコさんに言うのです。

さて、みなさんはこの家族の会話をどう思いますか？
「女は…、男は…、こうあるべきだ」と決めつけた考え方をしていませんか？

男女共同参画社会をめざす

家庭
女らしさ男らしさにと
らわれず、その人らし
さを尊重しあう家庭を
つくる

地域
古いしきたりや慣習に
とらわれることなく、
男女が平等に地域活動
に参画し、住みよい地
域をつくる

学校

男の子、女の子だから
ではなく、一人の人間
として個性を尊重し、
能力が発揮できるよう
な教育をめざす

職場

女性も男性も仕事と家
庭がゆとりをもって両
立でき、採用や昇進、
賃金での男女差をなく
し、ジェンダーにとら
われない職場をつくる

わたしたちができること

お互いが対等なパートナー
として、尊重し合う関係を作
りましょう。

男だから…、女だから…で
はなく、ひとりの人間として
個性が尊重され、能力を発揮
して、いきいきとくらすこと
のできる社会をめざしまし
ょう。

(県人権研修テキスト参照)
益城町教育委員会

ふるまひの 地名漫歩

歴史の変遷と地名

360

飯田山常楽寺②

加藤清正研究では第一級の熊本大学名誉教授の故森山恒夫先生が執筆された益城町史の中世編で、常楽寺は大所高所から捉えておられますので、炉辺談話塾では常楽寺研究の一環として町史にない常楽寺結界の調査を実施しました。

御船町木倉の小字地名の飯田口(木山方面からは木倉口と言う)から飯田山麓の鶴山谷に入り、雑草廢路を辿り冬でも流れている小溪流を渡るとすぐ上に200平方メートル(約二畝)程の平地に、用途不明の縦横深さ1メートルの石造りの穴があり瓦が散乱していたので、常楽寺の僧坊屋敷跡の一つと思われ、山路を少し登ると追分け地蔵があり、その先は敷に覆われて通れず、廢道となつていきます。

大正時代飯野村木崎出身の森上高明氏の多額の寄付により御船往還(現在の産交バス木山〜御船路線)の改修が行われるまでは、この山道が御船から常楽寺の前を通り土山、砥川、木山に

到る当時唯一の幹線道路で、明治10年の西南戦争では木山・御船の攻防を懸けて官薩両軍が往来し、この山路で激しい戦闘が行われた古戦場でもあります。

この僧坊屋敷跡の瓦の中に明治時代の土山瓦師の在銘の瓦がありましたので、廢仏毀釈後は御船飯田口からの常楽寺参道の茶店の形で蠟燭や線香を売る休憩所として利用され、昭和初年の抱瘡治癒の参詣時までは修復を重ねて存在し、以後こちらからの参詣が絶え、次第に荒廢したのでしよう。

実際、昭和58年以後の益城町史編纂時の調査の時には、馬頭観音の追分がある天君方面と木倉口の分岐点入口からすでに荒廢していました。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



常楽寺から木野倉へ下る山道の追分地蔵